

伊能嘉矩の台湾原住民族研究

はじめに

伊能嘉矩(二八六七—一九二五年)は日本の台湾植民地統治初期一八九五年一月から一九〇六年一月まで台湾に滞在し、台湾を対象とした歴史学・人類学研究を精力的に行った。編著書は台湾関係書籍だけでも計一五冊にのぼる。特に『台湾蕃政志』(台湾総督府民政部殖産局、一九〇四年初版)や『台湾文化志』(刀江書院、一九二八年初版)は現在でも台湾史研究に必須の書物として読み続けられている。台湾研究だけではない。渡台前は教育関係の新聞記者として活躍し、岩手県遠野に帰郷してからは郷土研究に情熱を傾け、多くの著作を遺している。

伊能は現在台湾でも高く評価されている。例えば第二次世界大戦後五〇年以上にわたって台湾史研究に携わってきた曹永和氏(元台湾大学教授、現中央研究院院士)は、『冲縄学』に於ける伊波普猷の如く、伊能嘉矩は実に偉大なる『台湾学』のパイオニアであると最大級の讃辞をおくっている。

小林 岳 二

筆者は、台湾の民間博物館である順益台湾原住民族博物館の研究助成により結成された日本順益台湾原住民族研究会に属し、研究会に紹介された伊能嘉矩所蔵の写真を整理し、写真集に編集した。写真集所収の拙稿では、伊能の履歴や思想、研究業績、そして原住民族に関する人類学的著述の現代的意味について詳細に論じたが、本稿では写真集で論じた伊能の著作の現代的意味の中で、特に、近現代の台湾におけるエスニック・グループの形成を再検討するために、伊能の著述を読み直す必要があるということを、再び論じてみたい。伊能は台湾原住民族に対する近代的な人類学による民族分類を初めて行った。また、伊能は台湾におけるエスニック・グループの成立を議論する材料となる台湾史研究を体系立てたのである。

但し紙幅の関係から、伊能の著述の内容自体を検証するというよりも、台湾のエスニック関係の歴史的展開と伊能の著述の関係について概論としての問題提起が中心となる。

一 台湾の「族群」

伊能の著述の位置づけに入る前に、論点をより明確にするために、些か冗長となるが台湾のエスニック・グループについて概述しておきたい。

筆者は先に伊能の民族分類と述べ、またエスニック・グループという言葉も用いた。伊能の民族分類といった場合の民族は、所謂、機能主義的人類学における民族の客観的定義、つまり共通の出自で同一の文化・言語を保持する集団に対する静的な概念として用いている。それに対してエスニック・グループとは、客観的な民族の定義を基礎に置きつつも、国民国家の枠組みで、人間集団間の相互関係の中で歴史的に形成されたアイデンティティにも着目した動的な概念である。但し、筆者はこれを民族とエスニック・グループの定義として述べたつもりはない。本稿の議論で使い分けるための便宜的なものである。

本稿でなぜ、エスニック・グループという言葉を用いたか。それは台湾でのエスニック・グループ (ethnic group) の中国語訳「族群」について説明したいがためである。台湾での中国語では「民族」という言葉も用いるが、それはナーション (nation) の訳語として使われることが多い。ちなみにレース (race) の訳語では、「人種」よりも「種族」という言葉がよく使われる。日本では、エスニック・グループやナーションとともに「民族」と訳す場合がある。日本語の「種族」には、レースの意味はなく、言語や出自・文化を同じくする集団の意味で用いることが多かったが、現在では

差別的ニュアンスを含むとして使われなくなってきた。中華人民共和国でもレースの中国語訳は台湾と同じである。但し「族群」という言葉は使われず、「民族」か「族体」という言葉が用いられる。

台湾における「族群」という言葉の用例を一つあげてみよう。台湾では、一九九七年度から国民中学で、「認識台湾」という新課程がはじまった。九七年度は試用期間であったが、九八年度からは正式課程になった。⁽⁵⁾「認識台湾」の教科書には、「歴史篇・社会篇・地理篇」の三種があるが、「社会篇」の教科書では、台湾の族群の状況について、「原住民・閩南人・客家人・外省人（新住民）」は今日の台湾社会の四大族群を構成している。」と説明されている。⁽⁶⁾

しかし、日本人から見ると、この分類について訝しく思うに違いない。「原住民」を先住民のことを指すと想像してみても、「閩南人」や「客家人」とは、漢族内部の分類である。さらに、「外省人」とは、「本省人」と対になる言葉である。日本の植民地統治が終結する前、つまり一九四五年八月二五日以前から台湾に本籍を設け定住していた人々を「本省人」と呼び、漢族の閩南系や客家系の他に先住民も含まれる。「外省人」とは、第二次大戦後、中国大陆各地から台湾に移り住んできた人々を総称した呼び方で、ほとんどが漢族であるが、その他中国大陆各地に居住していた少数民族の移民も含まれる。人類学の分類の他に、歴史学や政治学的分類も混在しているのである。この「認識台湾（社会篇）」のような用例を前にすると、「族群」を民族とは訳しづらい。だが、「認識台湾（社会篇）」の四大族群は、台湾の人間集団を理解するのに最も現実に即

した分類といえる。

筆者が表題で用いた「原住民族」という名称も、靜的な民族概念でなく、動的なエスニック・グループとして捉えられる。台湾には、言語学上はオーストロネシア語族に分類される先住少数民族が居住している。人類学では固有の言語と文化を保持する民族として一般的に、タイヤル・サイシャット・ブヌン・ツォウ・ルカイ・パイワン・アミ・プユマ・ヤミの九つの民族に分ける。さらに、一七世紀以降本格化した中国大陆からの漢族移民の影響により漢化して、現在、固有の文化・言語をほとんど失ってしまった一〇以上の民族があり「平埔族」（平地に住む民族の意味）と総称される。前者九民族の成員の殆どは「原住民」籍に属し、台湾総人口約二二〇〇万人のうち、約三七万人（約一、七パーセント）いる。平埔族は、非「原住民」とされ、戸籍上の区別はない。台湾では、原住民族内の各民族に対しても族群という言葉を用いるが、本稿では人類学的な分類を意味するとして便宜的に民族を用いる。

一九九四年に中華民国政府は、「原住民」という名称を正式に採用したが、それ以前は「山胞」（山地同胞の略語）と呼ばれていた。山胞と非山胞という戸籍上の区別は、日本統治期の区別に基づいている。日本統治期に九民族は、一九三五年に正式に「高砂族」と総称されるようになったが、そのうち特別行政区である「蕃地」に住んでいた高砂族とその子孫を、中華民国政府は「山地山胞」とし、一般行政区に住んでいた高砂族とその子孫を「平地山胞」とした。⁽⁷⁾

日本統治期には現在の九民族は「高砂族」とされ、「平埔族」も戸籍上の区別があった。「高砂族」と改称される前は、現在の九民

族は「生蕃」や「蕃人」、「蕃族」と総称され、「平埔族」は「熟蕃」と総称されていた。

日本統治期の「生蕃」・「熟蕃」、そして「蕃地」という区別については、さらに遡って一六八四年から一八九五年に至る清朝の統治について述べなければならない。一八七四年の日本の台湾出兵（台湾では牡丹社事件と呼ぶ）時や日本領台期は「蕃」字が用いられたが、清朝は「蕃」字を用いた。清朝は統治下の先住民を「熟蕃」、統治外の先住民を「生蕃」、統治に入ってもない先住民を「帰化生蕃」（化蕃）と呼んだ。「生蕃」の住む土地が「蕃地」であり、清朝は「蕃地」の統治を放棄していた。「熟蕃」の漢化が次第に進むのに対し、「生蕃」の言語や文化は保持され、今日の九民族につながっているわけである。しかし、一八七四年の日本の台湾出兵により、清朝は台湾全島の実効支配確立を迫られ、積極的台湾統治策「開山撫蕃」に翌年から転じる。この際、台湾の最南端の恒春や台湾東部も清朝の州県に区分され、大陸からの移民拓殖が奨励された。日本統治期に「生蕃」居住地域でありながらも、普通行政区にされたのは、一八七五年以降に清朝の支配が及んだ台湾最南端や台湾東部なのである。清朝は中央山岳地帯の「生蕃」を遂に屈服させることができなかったが、日本は警察や軍隊の武力攻撃により、中央山岳地帯の「生蕃」を服従させ実効支配を確立し、警察による「蕃地」の統治を行った。清朝や日本の台湾総督府の引いた政治的境界線が、今日の戸籍にまで影響を与えているわけである。

「原住民」・「原住民族」という言葉は、従来政府が用いていた「山胞」という名称に対して、一九八〇年代以降の先住民の知識青年に

よる先住民族としての権利獲得運動、所謂「台湾原住民族運動」により、先住諸民族を統合する自称として創り出され改称が要求されてきたもので、政府も先住民運動家の意見を取り入れ、現在の中華民国憲法増修条文には「原住民」・「原住民族」という言葉が明記されている。「山地山胞」は、「山地原住民」・「平地山胞」は「平地原住民」と呼ばれるようになった⁽⁸⁾。

戸籍上の「原住民」には、平埔族は入らない。あくまでも九民族のみである。ところが、昨今、台湾の族群概念では、「原住民」の二大分類として、「高山族」と「平埔族」という区分が行われるようになった。前掲「認識台湾（社会篇）」や、「認識台湾（歴史篇）」でも、原住民は「平埔族」と「高山族」に分かれるとしている⁽⁹⁾。中華民国政府は、第二次大戦直後に確かに九民族に対する総称として「高山族」を用いていた時期もある。しかし、一九四七年に「山胞」に改めている⁽¹⁰⁾。

台湾原住民族運動により、台湾社会で「原住民」乃至「原住民族」という名称が普及する前は、行政上の名称と関係のない人類学的な先住民族の総称として、「土著（着）民族」が使われることが多かった。九民族の総称として高山族が用いられることもあったが、平埔族と高山族という二大族群として並べることは一般的ではなかった。

平埔族という言葉が、台湾社会でひろく知られるようになったのは、そう古いことではない。日本人がつくりだした高砂族という名称に対して、平埔族という名称は、清代に漢人が平原部に住む原住民を指して呼んだ「平埔番」からきている。日本統治期や第二次大

戦後にも、平埔族に関する人類学や言語学、歴史学の研究が行われてきたが、ブームといえるほど、研究が盛んになり、従来漢人とされてきた人々の中からも平埔族としてのアイデンティティを主張する者が出てきたのは、八〇年代以降、特に九〇年代に入ってからである。

台湾の政治の民主化が進展するとともに、台湾の文化や歴史を見直し、台湾人としてのアイデンティティを模索する「本土化」現象が起こったが、平埔族に対する熱気も「本土化」の一つとして捉えられる。中国大陆と台湾を対置する兩岸関係から見た場合、平埔族の存在は、漢人と原住民の融合した台湾人の象徴ともいえる存在になる。これは、台湾外の第三者的立場から容易に想像できることである。しかし、筆者が台湾の平埔族に関する出版物を見る限り、ナショナルな民族主義を主張するために、平埔族が語られることは殆どなく、台湾の各地方の歴史や文化の多様性を示す象徴として語られることが多いように感じられる。

現在、原住民籍にある九民族の成員は、高山族という言葉を始め使わない。九民族のうち、アミやプユマは東部平原に住み、ヤミ（近年はタオと自称）は東南海上の蘭嶼島に住んでいる。現実の九民族の居住域は決して山地とは限らないのだ。また、台湾原住民族運動では、原住民の運動家から「高山族」というのは、外部者による呼び方（他称）として退けられた経緯がある。九民族のそれぞれの民族に対するアイデンティティを持ち、日本統治期から現在に至るまで漢族とは区別されてきた九民族の成員にとって、近年突然、平埔族としてのアイデンティティを主張し始めた者に対して違和感

を持たざるを得ないのである。

平埔族と対置するために、近年、再び高山族という名称が用いられ出したと考えられる。

以上見てきたように、現在の「原住民」籍の起源やその中の「山地原住民」「平地原住民」という区分、「高山族」と「平埔族」の区別という問題について検討する際に、清朝が「生番」の統治を放棄するために引いた政治的な境界線や、日本統治期の「蕃地」という特別行政区の問題等に遡らざるを得ないのである。

二 固定化する民族像

『認識台湾（歴史篇）』で、原住民を中心に扱っているのは、「第二章史前時代 第二節原住民社会」である。その中では「平埔族」と「高山族」について説明されているが、「高山族」の分類と社会組織については次のように述べられている。

慣例上の高山族を指しているのは台湾の山地・東部及び蘭嶼島に居住している泰雅族・賽夏族・布農族・鄒族・魯凱族・排湾族・卑南族・阿美族・雅美族等の族である。各族の社会組織は互いに異なり、あるものは母系社会に属し、家産は女性性が継承する。あるものは父系社会に属し、家産は男性性が継承する。あるものは貴族社会に属し、土地は貴族の所有となる。⁽¹¹⁾

翻訳は筆者によるが、民族名だけ敢えて原文の漢字表記とし、不十分なながらも中国語（北京官話）の発音に近いルビをふった。日本人の人類学上の一般の表記はタイヤル（泰雅・サイシャット（賽

夏）・ブヌン（布農）・ツォウ（鄒）・ルカイ（魯凱）・パイワン（排湾）・プユマ（卑南）・アミ（阿美）・ヤミ（雅美）である。⁽¹²⁾日本と台湾、どちらの表記が正しいかというと、どちらも正確ではなく、各民族の言語の発音が、日本語や中国語のアクセントに変わってしまっているわけである。では、個々の名称が何を表すかというと、サイシャットやヤミ等、現地の人も意味がよくわからないものもある。例えばタイヤル一つをとってみても、その意味は「人」・「真の人、勇ましい人」・「同族の人」・「蕃人」などであるというが、地方によってタイヤルの他に、アタヤル、タヤル、イタル、ターヤン、タイイン等と異なる。別の人間を意味する語もあり、地域によりセデクや、スコレク、ツォレなどがある。

九民族の名称は、日本統治期から現在までの間に、人類学者や言語学者が様々に命名してきたが、次第に取捨選択され固定化されてきた。名称の問題だけではない。民族の数や居住範囲も研究者によって説が異なっていたが、政府が一つを選んで固定化してきた。社会組織についても、母系制・父系制・貴族制といった分析は、勿論誤りではないが、常に変化しつつ原住民族の多様な社会を、近代人類学の分析概念によって、枠に当てはめたといえる。

台湾先住諸民族は伝統的に、粗放な農耕や狩猟・漁撈活動を生業としてきた。個々人の活動は村落を中心としており、その地理的知識は人類学者が分類した各民族の範囲に及ぶものではなかった。各民族ごとに政治的統合を遂げていたわけでもない。原住民は、日本の植民地統治下で、日本語による教育を通して、日本当局により民族名を与えられ、その民族に対して帰属意識を持つように誘導され

てきたのである。

研究者による調査報告の權威化、政府の分類の固定化という問題については、国民国家内におけるエスニック・バウンダリーとエスニック・アイデンティティの關係、文字を持つ者と持たない者の關係、近代人類学の分析概念の歴史性、民族誌的現在における「伝統」文化の切り取り、調査者と被調査者の植民地的權力關係など、様々な論点から検討することが可能であろう。

固定化された民族名や社会組織についてのイメージ、それが中学校教科書の先史時代の項で、台湾の先住諸民族の「伝統」的な「特有」の文化として、説明されているわけである。ちなみに『認識台湾』では、原住民の社会の変化を中心に取上げた箇所はない。

しかし、言うまでもなく近現代に原住民の社会は大きく変化した。特に一九六〇年代以降の台湾の高度経済成長で、多くの原住民は都市に流入してきた。冠婚葬祭の折にしか村に帰らない若者や、原住民と漢人の両親をもち生まれた時から都市に住んでいる子供等、主に本やテレビから原住民の文化を学んでいる者も多い。

民族像の固定化に対して、各民族成員の中から戸惑いの声があがり、原住民側から積極的に押し付けられた民族像を改めて欲しいという要求も出ている。⁽¹⁴⁾しかし一方では、政府が民族分類を行って各民族の地位を認め、多元的文化を尊重している現状では、原住民が政治運動や文化活動を進めていくために、權威化され固定化された民族像をうまく利用している場合もある。

前節では「原住民」籍や、「高山族」「平埔族」という分類の歴史性について述べたが、原住民の中で言語や文化を基準にした

民族分類についても本節で述べてきたように多くの問題が潜んでいる。民族像の固定化を検討するには、日本統治期から現代に至る一百年以上にわたって、人類学の研究史の展開や歴代政権の政策との関連等にも目を向けなければならないのである。

三 伊能嘉矩の人類学研究

台湾原住民民族に対する実地調査に基づいた近代人類学による民族分類と正しい得る分類の起源を求めると、伊能嘉矩の分類にいきつく。伊能は『台湾蕃政志』や『台湾文化志』等の歴史研究から歴史学者と見られがちだが、伊能は台湾原住民民族に対する人類学的研究を志して渡台したのであり、渡台以後、積極的に調査を行って、『東京人類学会雑誌』等の雑誌に多くの論考を発表している。伊能の民族分類と社会組織の分析については別稿で詳しく論じたが、こ

こでもう一度簡単に確認しておきたい。

伊能の民族分類は、伊能と粟野伝之丞の共著『台湾蕃人事情』(台湾総督府民政部文書課、一九〇〇年)に整理されている。『台湾蕃人事情』は、両者が台湾総督府民政部事務囑託として「蕃人教育施設準備」の命を受け、一八九七年五月二三日から十二月一日にかけて台湾全島を一周して行った各民族の調査がもとになっている。伊能は原住民の人類学的調査・歴史学的調査を担当し、粟野は地理や生物の調査・原住民民族に対する教育方針についての調査を行った。同書は台湾原住民の学術的分類の嚆矢となり、各民族の社会組織や衣食住等についての、最初の体系的な研究といえる。

『台湾蕃人事情』出版の前に、伊能は一八九八年に民族分類を発

表しており、『台湾蕃人事情』の民族分類も伊能によるものであったと推測される。⁽¹⁶⁾伊能は自身が実際に調査で得た結果と、調査時の原住民所轄官庁であった民政局殖産部下の各地撫墾署の資料等を総合して分類を行った。一八九八年発表の文章での分類の基準は、一、体質上の特徴・二、土俗の異同・三、思想の進否・四、言語の異同・五、歴史的口碑等であり、学術的な分類といえるのである。

『台湾蕃人事情』では整理された分類が載せられ、八族があげられている。アタイヤル族・ヴォヌム族・ツオオ族・ツアリセン族・スパヨワン族・プユマ族・アミス族・ペイポ族である。ペイポ族(平埔蕃)はさらに、タツオ・シライヤ・ロツア・ポアヴォサア・アリクン・ウウプラン・パアゼツヘ・タオカス・ケタガナン・クヴァラワン・アムトウラアに分けられている。伊能は後に、これらの分類を若干修正している。

伊能以前の研究者による分類と比べた場合の評価を、同時代の研究者鳥居龍蔵は一九一〇年に「人類学研究・台湾の原住民(一)序論」で述べている。鳥居によれば、『台湾蕃人事情』の分類以前に、一般に受け入れられていたのはG・ティラーの分類で、パイワン・阿眉・ティブン(ピウマ族のティブン部落・平埔蕃の分類だという。しかし、このティラーの四分類は不十分で、伊能の分類のほうはあるかに精確であり、当時、伊能の分類が内外に受け入れられていたという⁽¹⁷⁾。明治期の原住民民族に関する書物はおおよそ伊能の分類に従っている。

民族分類だけでなく、『台湾蕃人事情』は各民族を網羅した民族誌として、明治期には最もよくまとまったものであった。『台湾蕃

人事情』は次の編成からなっている。

- 第一篇蕃俗誌 第一章緒説 第二章各説(第一アタイヤル族 第二ヴォヌム族 第三ツオオ族 第四ツアリセン族 第五スパヨワン族 第六プユマ族 第七アミス族 第八ペイポ族)
- 第三章総説(第一蕃人ノ種類並ニ地理的分布 第二蕃社及戸数人口ノ統計 第三統制的現状 第四土俗 第五慣習 第六生業 第七雜記)

第二篇蕃語誌

- 第三篇地方誌 第一章緒説 第二章各説(第一台北新竹地方誌 第二南庄地方誌 第三東勢角・大湖地方誌 第四埔里社地方誌 第五嘉義雲林地方誌 第六鳳山地方誌 第七恒春地方誌 第八台東地方誌 第九宜蘭地方誌)

第四篇沿革誌 第一章理蕃沿革史(第一和蘭人ノ理蕃 第二鄭

氏ノ理蕃 第三清政府ノ理蕃 第四概説) 第二章蕃人教育

沿革誌(第一和蘭人ノ蕃人教育 第二支那人ノ蕃人教育)

(附) 台湾蕃地交渉年表

第五篇結論

このうち人類学的分析は、「第一篇蕃俗誌」でなされている。各民族の社会については、おおよそ次の項目により分析されている。

- 地理的分布・蕃社並ニ戸数人口・統制的現状(一、社会的組織・二、酋長ノ統治・(附) 刑罰・三、家族組織・土俗(一、住所・二、衣飾・三、飲食・慣習(一、結婚・二、生誕・三、疾病・四、埋葬・五、餓首・六、祭祖)・創世的口碑・生業(一、農業・二、狩獵・三、漁魚・四、家禽及ヒ家畜ノ飼養・

五、手工・六、織布及縫縫⁽¹⁸⁾

ここでは、記載の細部の検討は省略するが、総じていえば、伊能は領台三年目、平地においてもまだ台湾総督府の支配が辺地にまで行き届かず、日本側が「土匪」と呼んだ漢人のゲリラが頻繁に現われ、山地においては原住民の集落で日本人が入ったことのない村も多く、なお賊首が行われていた時期に調査を行っており、伊能も山岳部奥地までは入らず、山麓の村々の調査や現地の原住民・漢人・日本人からの聞き取りや文献調査で記述をしている。半年で台湾を一周したため、一箇所に長く滞在することはできなかった。各民族の分類や居住範囲、また、社会組織についての分析には誤りも多く、後々批判を受けていくことになるが、各民族の特徴をよくつかんでおり、僅か半年間の調査でこれだけ網羅的な民族誌を作成したことには驚かざるを得ない。それは伊能の人類学の素養と、研究に対する真摯な態度が然らしめるところであり、伊能が研究に命をかけたのは、自らの仕事が、原住民に対する教育政策の確立など、国家に少しでも寄与できればという思いがあったのである。

『台湾蕃人事情』出版以後も、伊能は『東京人類学会雑誌』等の雑誌に原住民の人類学的論文を発表し続ける。鳥居龍蔵が台湾調査の後、次第に大陸に調査地を移していったのに対して、伊能は台湾にこだわり続けた。単行本として刊行されたのは、栗野との共著である『台湾蕃人事情』のみだが、伊能は他にも各民族の詳細な民族誌を完成させていた。その民族誌は岩手県遠野市の伊能の子孫によって引き継がれている。⁽¹⁹⁾

一九一三年、森丑之助の分類を台湾総督府が採用し、「生蕃」は、

タイヤル・ブヌン・ツオウ・パイワン・アミ・ヤミ、サイセツトの七民族となった。森も伊能と同じく日本の領台初年に台湾に渡ったが、伊能が領台初年から原住民民族に関する論考を雑誌に発表したのに対して、森は一九〇〇年から雑誌に発表しており、伊能より遅れている。しかし、森は「生蕃」居住地域を誰よりもひろく踏査した人物として知られており、森の研究も研究史の中で見落とすことができない。また森は伊能の研究の誤りについて強く批判している。

大正期には、臨時台湾旧慣調査会による組織的調査が行われ、民族誌のシリーズが刊行され、今日でもよく利用されている。⁽²¹⁾

昭和期になると、台北帝国大学土俗・人種学研究室編『台湾高砂族系統所屬の研究』（一九三五年初版）、同言語学研究室編『原語による台湾高砂族伝説集』（一九三五年初版）が刊行された。両者の民族分類や、民族名称、各民族の居住範囲などは、当時の総督府の公式の見解と異なっているが、両者の研究が今日の民族分類の基になっている。⁽²²⁾

伊能の研究について、人類学や言語学の観点から、現在その誤りを多く指摘できるであろう。また、国家主義的・植民地主義的という評価を下すこともできるであろう。

しかし、前節で述べてきたように、伊能は、日本統治期から現在までの、人類学研究による原住民の民族像の固定化を振り返った時に、最初に検討しなければならない人物なのである。また、本稿では取り扱わなかったが、伊能の雑誌論文、特に平埔族に関する論文は、今日の平埔族研究に大きく裨益している。平埔族の習俗は漢化により、既に消滅してしまったものが多いが、伊能は消えつつあ

る貴重な習俗を記録していたのである。さらに筆者は、伊能の記録は、人類学的に失われてしまった習俗を再現するために再検討するのではなく、清末から日本統治期の変化しつつある台湾社会を記録した同時代史料として、読み直すべきだと考えている。そのことについては後ほど一節を設けて検討しよう。

四 政治的境界線と伊能の歴史研究

先に、清朝の引いた政治的境界線が、今日の「原住民」籍と非「原住民」籍、「高山族」と「平埔族」という区分のもとになっていると述べた。そのことが歴史学的に考証できるのは、やはり伊能の研究が基礎をつくったからだと考えられる。

伊能の台湾史研究の著作で代表的なものは、『台湾蕃政志』と、『台湾文化志』上・中・下巻である。伊能が台湾滞在中に著した『台湾蕃政志』は、一七世紀のオランダ植民地時代から一九世紀末の日本統治期前まで、オランダ、スペイン、鄭氏、清朝という歴代外来政権の原住民統治が扱われている約六五〇頁に及ぶ大著である。伊能は台湾滞在中に、対原住民民族政策史研究の他に、『台湾志』全三巻（文学社、一九〇二年）など、清代から日本統治直後までの台湾通史を出版し、雑誌にも台湾史に関する多くの論考を発表していた。一九〇六年に岩手県遠野に帰郷してからも、台湾総督府理蕃沿革編纂事務委員や臨時台湾旧慣調査会委員などに任じられ、台湾との関係は切れることがなかった。しかし、伊能が自らの歴史研究の集大成としてまとめていた「清朝治下ノ台湾ニ於ケル文治武備機関ノ変遷」は、一九二五年、突然マラリヤが再発し逝去したこ

とから、伊能在世中には遂に日の目を見ることはなかった。伊能の弟子の板澤武雄が中心となり、民俗学者柳田國男や経済学者福田徳三の助力を得て、『台湾文化志』として一九二八年に漸く出版することができたのである。⁽²³⁾

『台湾文化志』上・中・下巻は、各巻約二千頁にのぼる大著である。参考に各篇の項目をあげてみると次のようになる。

第一篇清朝以前に於て支那人に知られたる台湾 第二篇領台原
始 第三篇文治武備沿革 第四篇治匪政策 第五篇教学の施設
第六篇社会政策 第七篇特殊の祀典及信仰 第八篇修志始末
第九篇經政沿革 第十篇農工沿革 第十一篇交通沿革 第十二
篇商販沿革 第十三篇外力の進漸 第十四篇拓殖沿革 第十五
篇番政沿革 第十六篇台湾の割讓 第十七篇台湾に於ける地勢
の變遷

政治・経済・社会のあらゆる分野を網羅しているのである。

『台湾文化志』の清朝の原住民民族統治に関わる部分には、「第十五篇番政沿革」（下巻、四二一—九一〇頁）に記されている。やはり参考のために細部の項目を次に示しておく。

第一章理蕃施設

第一款對熟番の施設 第二款對生番の施設（第一節對生番消
極策 第二節對生番積極策） 第三款佩帶軍械の禁 第四款
民番結婚の制限

第二章番人の教化

第一節熟番の教育 第二節熟番の化育 第三節生番の教化
第四節賜姓政略

第三章番人に対する課租

第一節番餉（第一項熟番番餉 第二項生番番餉） 第二節番租（第一項番大租 第二項加留餘租 第三項元五租 第四項特殊の番租） 第三節塩課の蠲豁 第四節番社倉

第四章屯制

第一節屯番 第二節養贍埔地及屯田園

第五章防番機関

第一節 隘制 第二節隘租

第六章征番事略

第一節吞番番社の討伐 第二節水沙連番の討伐 第三節傀儡番の討伐 第四節大甲番社の討伐 第五節眉加臘社番の討伐 第六節恒春番の討伐 第七節台東加礼苑番の討伐 第八節奇密社番の討伐 第九節東勢角北勢番の討伐 第十節東勢角南勢番の討伐 第十一節大約拔番の討伐 第十二節台東平埔番の討伐 第十三節大南澳番の討伐

第七章漢番交渉餘志

第一節番人の対外遠征 第二節漢民の番地侵佔 第三節支那人の番人に対する觀察

右に煩雑になることを厭わず項目をあげてきたのは、これらの項目をもとにして、後の台湾開発史や、平埔族史研究が行われてきたからである。伊能は各項目を検討する際に一々文献からの典拠を示しており、引用史料と実際の文献を比べ合わせる事ができた。

伊能がはっきりと「熟番」と「生番」を分けて記述していることには注目できる。「熟番」のうちオランダ時代や鄭氏政権の時代に

既に漢人と雜居し、すぐに清朝の統治下に入った地域もあれば、清朝が武力でねじ伏せた地域もある。清朝は「熟番」に「番餉」を課し、「社学」等と呼ばれる教育機関を設けて教化していった。「熟番」は、狩猟や粗放な農業を生業としていたが、漢人開拓民は「熟番」から土地を借り、「番租」という小作料を支払った。地主であった「熟番」のうち、水稻耕作の技術をうまく導入して、その地位を高めていった者もあれば、逆に漢人開拓民の勢力増大に押されて困窮する者もいた。

清朝は大陸からの台湾渡航を制限して台湾の開発を規制し、「熟番」の保護政策を採り、「生番」の統治を放棄した。漢人が「熟番」の土地を開墾するのにも種々の制約を設けた。漢人が「生番」居住地である「番地」へ出入することは禁止され、境界線が設けられた。境界線は、初めは「生番」出沒の要口に立石するのみであったが、次第に土を盛って防壁とし、その横に溝を掘って境界とするようになった。この防壁を臥牛に形容して土牛といい、側溝と合わせて「土牛溝」という。漢人は土牛溝を越えてさらに開拓を進める。一七八六年林爽文の乱の後、土牛溝の外側に新たに「屯丁制」を導入し、「熟番」を屯丁として「生番」地区との境界線の警備にあてることになった。さらに「屯丁」に割り当てられた土地の外側も、漢人有力家が開拓することになり、生番の襲撃に備える公営や民営の「隘」が設立されていった。このように清代の台湾では、漢人の拓墾の進展に伴い「生番」と、漢人・「熟番」を分ける境界線が次第に内陸の「番地」へと移動していった。日本統治期、台湾総督府は「隘」制度を拡充して「隘勇線」とし、それを警察や軍隊の武

力で前進させながら、山岳部の「生番」を囲い込んで服従させていった。

伊能は、「熟番」と「生番」に対する清朝の政策の違い、「熟番」の土地経営方式や、境界線の「土牛溝」、さらに「屯丁」・「隘」という境界線の警備組織等を歴史研究として扱っており、この枠組みが以後の研究にも引き継がれているわけである。

しかし、台湾史の特に族群の議論の中で、伊能の研究に対する批判も出ている。尹章義は、大陸から渡台してきたのは福建省の泉州人が最初で海岸部の原野を拓き、次に福建省の漳州人が来て山に近い地域を開拓し、最後に客家系漢人が来て最奥の丘陵地帯に入ったという伊能の説に異論を唱えている。このような渡航年代の差による住み分けは、伊能説が踏襲され曲解されてきたものであるといい、それ以外のテーマを扱った台湾史の論文でも伊能の著作からの棒引きが度々なされ、原始史料を探していないものが見受けられるという。伊能は、開拓民はまず水を求めて水源を探すこと、また、一八世紀末から一九世紀にかけて分類械闘が頻繁に起こった結果、大陸での出身地別に分かれるようになったこと、を見落としているという。⁽²⁴⁾

この尹章義の指摘は、従来伊能説が台湾の歴史学界でどのように受け取られてきたかがわかると同時に、戦後の各地域での古文書の発掘と研究により、伊能の研究が乗り越えられた状況を示している。今日でも伊能の研究を全く無視できない場合がある。それは伊能が蒐集して著作で扱っている史料の中に、今日では散逸してしまったものがあり、伊能の著作の史料引用に典拠を求めざるを得ない場合

である。

現在では、先に渡台した閩南人が平原部の土地を占め、その後から来た客家人は山脚地帯を拓かざるを得なかったという観点は、台湾史学界ではほぼ否定されている。しかし、実際に客家系漢人は、「生番」と隣接して住んでいる場合が多く、「熟番」や「生番」の客家化という現象も見られた。逆に客家側が「熟番」や「生番」の影響を受けた場合もある。⁽²⁵⁾施添福は、閩南人や客家・「熟番」の住み分けは、土牛溝や屯丁、隘制度等の人為的境界線と、それに関わる清朝の開墾制限や開拓者の土地経営方式等が引き起こしたものであると指摘している。⁽²⁶⁾

伊能が提示した政治的境界線に関する論議が発展して、今日の族群形成の歴史的検証にまでつながっているわけである。

五 民族誌に記されなかった情報

伊能は渡台直後、人類学研究に精力を注ぎ、後に歴史研究に重心を移した。筆者にとって不思議なのは、伊能の原住民族に関する歴史研究に人類学的観点からの分析が見られないことである。つまり歴代政権の政策展開史がほとんどで、各民族の文化や社会組織が如何なる変容を遂げたのかということには一切触れられていない。これは伊能だけでなく現在の歴史研究にも通じることであろう。

一方、人類学研究では、調査時点の原住民族社会と政府との関係や、近代化による文化変容といった事柄は、特に戦前に限っていえばあまり扱われてこなかったと見受けられる。但し、戦前の人類学研究が歴史に対して全く無関心だったわけではない。例えば大正期

の『番族慣習調査報告書』のシリーズでは、各処に清代の文献史料の引用がなされ、漢族と原住民族との関係が検討されている。また、昭和初期の『台湾高砂族系統所属の研究』は、原住民の口碑から過去の各民族の移動経路を探り出し、調査時点における各民族の成立を明らかにしようとしたものであり、エスノヒストリー研究の優れた業績として今日でも高く評価されている。

筆者のいう、戦前の人類学者の歴史（時代性）の軽視とは、調査時点での原住民と周辺民族との関係や、政府との関係、また調査者の立場といったことにはほとんど触れず、既に変化してしまった社会の中から「伝統的」で「特有」の文化を再現しようとする傾向なのである。

このような人類学者の研究についてはこれまでも、植民地統治への批判を全くせずむしろ肯定的に捉えていたとして、戴國煒が厳しく批判していた。⁽²⁷⁾戦前の日本人の台湾原住民族観と政策の関係は、また別に稿を設けて議論すべき問題であらう。

ここでの筆者の関心は、近現代の歴史学や人類学のもつ学問的性質が、近現代の台湾原住民族像を固定化することになったのではない、ということである。

文献の検討を主たる研究方法とする歴史学は一先ずおいて、民族社会の中で行われた人類学調査をまとめた民族誌には、切り落とされ書き記されなかった情報がある。その情報をもう一度探すことはできないだろうか。

一九九二年、森口雄総氏により伊能の民族調査や旅行の日記の一部が活字化され出版された。⁽²⁸⁾また、伊能の曾孫にあたる江田明彦氏

も、伊能の調査メモを活字化して発表している。⁽²⁹⁾筆者はこれらの調査日記やメモを読むうちに、従来の民族誌では切り落とされてしまったであろう一百年前の台湾社会の貴重な情報が詰まっていることに気がついた。

断片的に例をあげると、一八九七年の台湾一周調査の日記である『巡台日乗』の中には次のような記述がある。

（明治三十年五月——筆者挿入）二二六日

いよいよ蕃地に入らんとし前日より先導を約せる通事許安(Koan)・阿枝(Aki)の二人を招く二人共に蕃地内出入すること二十餘年共に蕃婦を妻とし家宅を蕃地内に構ひつつありといふ殊に阿枝の如きは髪を辮にせずして蕃風に結び蕃衣して跣⁽³⁰⁾足し蕃帽蕃刀を具するの二状一見して支那人たるを認め難りき

これは伊能が、台北の南方の烏来というタイヤル民族居住区に入る際の案内人に関する記述である。通事とは、原住民の通訳を務める者で、漢人の中で原住民の言葉に達者な者になる場合もあれば、原住民の中で漢語に達者な者になる場合もあった。漢人が原住民の女性を妻としたり、また、原住民側が漢人の子供を養子に迎えることはタイヤル以外の民族でも見られた。漢人が原住民の女性を娶ることを清朝は禁止していた。このような通事は交易にも携わっていた。漢人と原住民の通婚は、原住民が漢化していく一因にもなった。しかし、ここで見られるのは漢化ではなく、「タイヤル化した漢族男性」である。辮髪もせず「蕃帽」（おそらく藤で編んだ帽子）を被り芋麻の衣服を着て日本の鉈の先端を尖らしたような山刀を差している。原住民と漢族の境界地帯で、一方的に原住民が漢化して

いく様ではなく、漢人が原住民族の影響を受けている状況をよく示している。

次に、やはり烏来で伊能が会った人物の例をあげよう。

(明治三十年五月——筆者挿入) 二十七日：

行くこと十餘町蕃人の男女十数共に耕殖をなせるに一行を見て皆な来り集る中に詩朗(Shirō) あり詩朗も彼れの台北に至りし時予と相知れるもの、而して彼れは劉銘伝の蕃学堂を台北に開きしとき実には選ばれて学生となりしもの一時は官話及び台湾土語を初め読書詩賦の術にまで上達せしといふも今は断髪文身の一蕃丁に過ぎざりき、聞く彼れの山に帰るや学堂常に用ゆる処の衣冠を著け経書を手にして行きたりしも漸く山に入ること遠きに及び彼れは熟考数四思ひけん経書を取りて谿谷の底に投棄し衣冠を脱して路傍に捨て再び阻蹊蹊蹊の旧態となりて入りたりしとぞ⁽³¹⁾

「蕃学堂」よりも「番学堂」のほうが史料的には正しい。清末の日本の台湾出兵により台湾の実効支配確立を迫られた清朝は一八七五年から「開山撫番」政策を採り、旧来の台湾渡航制限と「番地」への入禁を全面的に解除し、「生番」の統治と「番地」の拓殖を図った。清仏戦争の後、一八八五年に台湾建省が行われ初代台湾巡撫に劉銘伝が任ぜられたが、劉は「開山撫番」政策の刷新を図り、その一環として台北に北部タイヤルに対する教育機関である「番学堂」(一八九〇—一八九二年)を設けた。「番学堂」は日本統治期以前に閉鎖されていたため、「詩朗」が既に清代にタイヤルの生活に戻ったのか、それとも日本統治期に入ってからタイヤルの生活に戻

ったのかはここではわからない。

「番学堂」の卒業生には、「詩朗」と逆の道を選んだ者もいた。伊能が『東京人類学会雑誌』に載せた文章に次の人物の話がある。

蕃人の教育 又た蕃人を治化するの方便として一時(劉銘伝の時)台北城南門外なる西学堂に蕃民の子弟を集め授くるに台湾土語及び支那官話を以てし以て頑迷の心を去り凶暴の俗を除かしむることに努め衣食住より日用銀錢までを官給と致しました(現に大科埤に住する生蕃通事蒲靖 Pu-choi)といふ者は合股 Hui-a-to 社より出、教育を受けたりしもの、由にて今年二十三才、正さに支那風の辮髪と衣装とをなし自在に台湾土語を話し且つ筆談をも巧みにし今は商業を営み居るといひます⁽³²⁾

「西学堂」は誤りで「番学堂」が正しい。

「蒲靖」の場合は、漢族の社会の中に上手く適応していったのである。「詩朗」や「蒲靖」は、まさに清末から日本統治期という政権交代期に、自らの生き方を主体的に選択した例といえる。

ここであげた例は、民族誌では消去されてしまった例外的人物なのだろうか。実は例にあげた人物は例外とはいえないのかもしれない。原住民族の社会は多様で常に変化し続ける。それは現代でも同じである。民族誌に記され権威化されたイメージと現実とは大きく異なっているのではないだろうか。

以上のように、伊能が『台湾蕃人事情』中の民族誌の部分である「第一篇蕃俗誌」や『台湾文化志』等、学問として体系化する前の日記やまた雑誌の論考の中には、固定化される前の民族についての貴重な情報が多く含まれている。本稿では詳しく扱えなかったが、

『台湾蕃人事情』については、「第一篇蕃俗誌」よりも「第三篇地方誌」のほうが時代性ということでは興味深い記述が多く見られる。伊能の著述を、研究として読みその誤りを指摘するだけでなく、一百年前の社会を理解するための同時代史料として読む必要があるのである。

また、このように民族社会の調査者や民族誌の執筆者の生きた時代について配慮する視点があれば、実は従来の客観的な研究に思えてきた民族誌に対しても、その背景にある時代性を考慮して読まなければならないことに気づくのである。

おわりに

以上述べてきたように、台湾の各族群、特に今日でいうところの台湾原住民族の歴史的形成を検討するには、人類学と歴史学の双方の研究史を振り返ることが不可欠である。原住民族内の各民族は、日本統治期から現在に至る人類学的な民族分類により区分され、文化についてのイメージも付与された、ある意味で「つくられた民族」といえるのである。今日の「山地原住民族」・「平地原住民族」籍という区分、「高山族」・「平埔族」という区別については、清朝の設けた「土牛溝」や「隘」という政治的境界線による「熟番」と「生番」の区分、日本統治期の「熟番」（一九三五年以降の平埔族・「生番」）（一九三五年以降は高砂族の区別、「蕃地」という特別行政区の内と外という問題等を歴史的に検討しなければならない）。

台湾についての人類学と歴史学の研究史を振り返った場合、伊能

の研究がまず祖上にのせられなければならない。伊能の研究は確かに現時点から見れば誤りも多く指摘できよう。しかし、だからといって無視することはできない。近現代の民族分類や政治的境界線は歴史的に不動であったわけではなく、これまでに幾度となく修正されてきた。研究者の見解の相違が反映して、政策担当者による境界の線引きも何度となく修正されてきた。度重なる修正は、各民族成員にも戸惑いを与えてきた。伊能の研究は、明治期には最も權威を有しており、日本統治期の人類学的な民族分類にしても、また、「熟蕃」と「生蕃」の区別、「蕃地」の内と外という政治的境界線にしても、明治期の境界線の線引きを研究する際に検討することが不可欠である。

また、民族分類や政治的境界線による区別ではとらえきれない事柄がある。本稿第五節で例にあげたのは、民族分類や政治的境界線を跨いだ、また、そこから抜け出ようとした人々の姿であった。歴史に見るならば、このような不断の変化こそ常態といえるのではない。

伊能の研究を古典として極度に崇めたり、また、その誤りを強調して顧みないのではなしに、その著作の歴史的意味をもう一度考え直す必要がある。また、『台湾蕃人事情』や『台湾蕃政志』、『台湾文化志』といった伊能の代表的な著作乃至共著書だけでなく、雑誌の論考や新聞記事、日記などにも目を向ける必要がある。それらは伊能が学術研究として体系化を意識する前の著述といえ、人類学の民族誌や歴史学の政策展開史では、取り上げられなかった変化過程にある台湾社会の情報が詰まっているのである。

- (1) 伊能の台湾関係編著書の一覧は省略する。詳しくは、拙稿「伊能嘉矩の台湾原住民族研究の人類学的価値」(日本順益台湾原住民族研究会編『跨越世紀の影像Ⅱ 伊能嘉矩收藏台湾原住民族写真集』(仮題)、順益台湾原住民族博物館、一九九九年発行予定)を参照。但し、一九九〇年代になって新たに出版された日記や言語調査ノート等は数に入れている。伊能について論じた文章は様々なが、特にその生涯について知っているには、板澤武雄「伊能先生小伝」(『台湾文化志』上巻、刀江書院、一九二八年初版)、遠野市立博物館「伊能嘉矩——郷土と台湾研究の生涯」(第三一回博物館特別展図録、一九九五年)、荻野馨著「伊能嘉矩の歩み・生涯その一」(『遠野物語研究』創刊号、一九九六年八月)、江田明彦「伊能嘉矩年譜」(前掲『跨越世紀の影像Ⅱ 伊能嘉矩收藏台湾原住民族写真集』)を参照せよ。
- (2) 伊能嘉矩原著・森口雄稔編『伊能嘉矩の台湾踏査日記』台湾風物雜誌社、一九九二年、曹永和「序」二五頁。
- (3) 前掲『跨越世紀の影像Ⅱ 伊能嘉矩收藏台湾原住民族写真集』は、伊能嘉矩の曾孫伊能邦彦氏所蔵の写真が、同じく伊能の曾孫江田明彦氏の尽力で紹介され、それを整理したものである。伊能嘉矩所蔵資料のうち、伊能邦彦氏に伝わったものの大半は岩手県遠野市立博物館が受託管理しているが、日本統治期に台北帝国大学に移された資料は、そのまま台湾大学に引き継がれている。同写真集では台湾大学所蔵資料は除外してあるが、台湾大学所蔵資料については、呉密察主編『台湾史檔案・文書目録』(三)国立台湾大学蔵伊能文庫目録(国立台湾大学、一九九七年)を参照せよ。
- (4) このような台湾での「民族」「族群」「種族」の使い分けは、例えば民族主義やエスニシティについて専門的に扱った論文集である邵宗海地編『族群問題与族群關係』(幼獅文化事業有限公司、一九八五年)に見られる。
- (5) その内容や意義について台湾内外で多くの論議をよんだ「認識台湾」課程について、日本語で読みやすいものとして、松金公正「新教科「認識台湾」導入がもたらすもの——台湾における「国民」意識の形成」(『アジア研ワールド・トレンッド』第三九号、一九九八年一〇月)を参照。
- (6) 国立編訳館主編『認識台湾(社会篇)』、国立編訳館出版、一九九七年、八頁。
- (7) 「山胞」や「原住民族」の身分の認定については、細かい規定があり、その法令も一九五四年の「台湾省政府令」(中華民國四三年二月九日(肆参)府民四字第一九七号)以来、度々修正されてきた。詳しくは、台湾省文献委員会編印『台湾原住民族史料彙編 三 台湾省政府公報中有關原住民族法規政令彙編(一)』(二二—一三四頁)を参照。同書は一九九二年の「山胞身分認定標準」(中華民國八一年八月七日内政部第(八)一内民字第八一八五〇一号令修正發布)まで収録されているが、さらに一九九四年には修正されて、「原住民族身分認定標準」(中華民國八三年十月二十四日内政部台(八三)一内民字第八三八四七七三号令修正發布)が出された。「原住民族身分認定標準」の全文については、「台湾省政府公報」(冬字第四一期、台湾省政府秘書處發行、一九九四年一月二日)を参照。
- (8) 清朝時代から、現在までの台湾先住諸民族の総称の変遷については、詳しくは拙稿「台湾原住民族、模索していく民族像」(『PRIME』第六号、一九九七年五月)・同「最近の「原住民族」をめぐる情況」(『台湾原住民族研究』第二号、一九九七年)を参照。特に一九三五年の改称については、戴國輝「霧社蜂起事件の概要と研究の今日の意味——台湾少数民族が問いかけるもの」(『思想』、一九七三年二月初出、戴國輝編『台湾霧社蜂起事件——研究と資料』、社会思想社、一九八一年所収、一四—一五頁)に詳しい。
- (9) 前掲『認識台湾(社会篇)』一一三頁。国立編訳館主編『認識台湾(歴史篇)』(試用本、国立編訳館出版、一九九七年、一〇—一三頁)。
- (10) 「台湾省政府庁通報」(参陸巳感民丙字第九三六五号中華民國三六年六月二八日)、内容については前掲『台湾原住民族史料彙編 三 台湾省政府公報中有關原住民族法規政令彙編(一)』を参照(五八頁)。
- (11) 前掲『認識台湾(歴史篇)』一二頁。
- (12) 現在、台湾で使われている九民族の漢字表記は、一九五三年に台湾大

学考古人類学系で決められたものが基になっている（台湾大学考古人類学系『考古人類学刊』第一期、一九五三年、「考古人類学界消息」中の内逸夫「本系画一台湾土著各族中西文名称」、三七—三八頁）。

(13) 台北帝国大学土俗・人類学研究室編『台湾高砂族系統所屬の研究』、刀江書院、一九三五年初版、二二頁。

(14) 度重なる民族分類の変遷に戸惑うルカイの人々の様子が、笠原政治「幻のヘッアリセン族」——台湾原住民ルカイ研究史（その二）（『台湾原住民研究』第二号、一九九七年）で述べられている（二二—二三頁）。プユマ民族である孫大川の「面对人類学家的的心情」——「鳥居龍藏特展」罪言」（順益台湾原住民博物館編『跨越世紀の影像——鳥居龍藏眼中的台湾原住民』、順益台湾原住民博物館発行、一九九四年初出）では、人類学者の母系社会や年齢階級（年齢階梯制）といった分析が、プユマ民族の古老に混乱を引き起こした様について述べられている（五四頁）。

(15) 前掲拙稿「伊能嘉矩の台湾原住民研究の人類学的価値」。

(16) 伊能嘉矩「台湾通信（第二十二回）台湾に於ける各蕃族の分布」、『東京人類学会雑誌』第一四卷第一四六号、一八九八年五月号。

(17) 鳥居龍藏「人類学研究・台湾の原住民（二）序論」、『東京帝国大学理科大学紀要』第二八冊第六編、一九一〇年二月、「鳥居龍藏全集」第五卷所収、朝日新聞社、一九七六年、九頁。

(18) 前掲笠原「幻のヘッアリセン族」——台湾原住民ルカイ研究史（その一）では、伊能のツァリセン族に対する人類学分析の記述について、拙稿「伊能嘉矩の台湾原住民研究の人類学的価値」では、伊能のスパヨワン族に対する人類学分析について、詳しく取り扱っている。

(19) 遠野市立博物館が受託管理している伊能の資料の中には、未刊行の八冊の各民族の民族誌草稿がある。その内の一冊には「アタイヤル蕃俗志上篇」の表題がつけられている。他の七冊は表題がないが、ツァリセン・プユマ・パイワン・ヴォナム・アミス・ツォオ・ペイボ（ここで扱われているのは伊能が未漢化平埔族としたサイシャット）についての民族誌であり、

「アタイヤル蕃俗志上篇」と同じ編集方針である。

(20) 森丑之助の研究と著作については、宮岡真央子「森丑之助の著作目録及び若干の解説」（『台湾原住民研究』第二号、一九九七年）・同「野人の文化人類学——森丑之助の生涯と研究」（『南方文化』第二四輯、一九九七年一月）を参照。

(21) 臨時台湾旧慣調査会に関する研究はいくつかあるが、ここでは特に参照論文として、国分直一「東アジア地中海の道」（慶友社、一九九五年）中の「V南方学の拠点——台湾 二 大正期刊行の二種の台湾原住民慣習報告書の刊行をめぐる」をあげておく。また、特に臨時台湾旧慣調査会の中で民族誌として最も利用価値の高い「蕃族慣習調査報告書」五巻計八冊については、中央研究院民族学研究所から中訳本の出版がされている。九八年現在、第一巻の泰雅族（一九九六年出版）と第三巻の賽夏族（一九九八年出版）が刊行されており、逐次出版される予定である。同書はたんなる中国語訳ではなく、日本語原書では各民族の言語表記が片仮名になっていたのを、言語学者や人類学者、さらには各民族の在野の研究者の共同作業により、言語学に基づいた音素表記に直してある。

(22) 日本統治期の原住民に対する分類の変遷については、馬淵東一「高砂族の分類——学史的回顧」（『民族学研究』第一八巻第一・二号、一九五三年初出、「馬淵東一著作集」第二巻、社会思想社、一九七四年所収）を参照。

(23) 「台湾文化志」の解題について詳しくは、邱淑珍「伊能嘉矩の『台湾文化志』考」（『遠野物語研究』第二号、一九九八年三月）を参照。

(24) 尹章義「閩粵移民的協和与対立——客属潮州人開墾台北与新莊三山國王廟の興衰史」、「台北文獻」第七四期、一九八五年二月初出、尹章義『台湾開發史研究』、聯経出版、一九八九年所収、三五八頁。

(25) 例えば、サイシャット民族は客家人と隣接して居住しており、相互に影響を受けていた。また、拙稿「台湾原住民の辨髪」（『台湾原住民研究』第三号、一九九八年二月）や拙稿「清末・日本統治直後、政權交代期の

台湾先住民——文書から見た「帰順」(『東洋学報』第八〇巻第四号掲載予定、一九九九年三月)では、台湾南端の恒春・パイワン民族と客家系漢人の相互関係について述べてある。

(26) 施添福「清代台湾竹塹地区的土牛溝和区域発展——一個歴史地理学的研究」、『台湾風物』第四〇巻第四期、一九九〇年二月初出、張炎憲他主編『台湾史論文精選』(上)、玉山社、一九九六年所収。

(27) 前掲戴「霧社蜂起事件の概要と研究の今日的意味——台湾少数民族が問いかけるもの」、『台湾霧社蜂起事件——研究と資料』、二八—四二頁。

(28) 前掲「伊能嘉矩の台湾踏査日記」は、編者の森口氏が伊能の調査や旅行の日記を、時間をかけて整理して活字にし、さらに詳細な注記や解説をつけたものである。また、中国語に訳した伊能嘉矩著・楊南郡訳注『台湾踏査日記』上下二巻(远流出版、一九九六年)、同著・同訳注『平埔族調査旅行——伊能嘉矩〈台湾通信〉選集』(远流出版、一九九六年)にも、訳者楊南郡氏の詳しい注記がついており、さらに使用するのに便利になった。

(29) 伊能嘉矩著・江田明彦編「随観抄記」、『台湾原住民族研究』第一号、一九九六年。同著・同編「探検随観」、『台湾原住民族研究』第二号、一九九七年。

(30) 伊能「巡台日乗」、前掲「伊能嘉矩の台湾踏査日記」、八頁。

(31) 同上、九頁。

(32) 伊能嘉矩「台湾通信(第三回)」、『東京人類学会雑誌』第一巻第一一九号、一九九六年二月。ちなみに「蒲靖」の写真は、前掲日本順益台湾原住民族研究会編『跨越世紀的影像Ⅱ 伊能嘉矩收藏台湾原住民族写真集』のナンバー一五に載っている。

※補記 本論脱稿後、台湾の国立台湾大学で、大学創立七〇周年と新図書館の落成を記念して、新図書館で一月二〇日から二月五日まで「伊能嘉矩与台湾研究特展」が開催され、一月二〇日にはシンポジウムも行われた。その際に、国立台湾大学図書館伊能嘉矩与台湾研究特展専刊編輯小組

編輯(編輯顧問・吳密察)『伊能嘉矩与台湾研究特展専刊』(国立台湾大学図書館、一九九八年)と、台湾大学人類学系の所蔵している伊能収集の民具をまとめた国立台湾大学人類学系編『台大人類学系伊能藏品研究』(国立台湾大学人類学系、一九九八年)が出版された。